



Title	養育者と子どもの会話における「てもらう」の使用と言語社会化
Author(s)	乾, 友紀
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 27-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

養育者と子どもの会話における「てもらう」の使用と言語社会化

日本語学 博士前期課程 2 年

乾 友紀

はじめに

日本語は恩恵の授受に敏感な言語であり、授受表現による恩恵の明示は日本語らしい表現にとって重要な役割を演じているとされる¹。従来、授受表現は、構文的特徴や方言の観点から研究がなされ、親子の会話や子どもの発話、「言語社会化 (language socialization)²」という観点については着目されてこなかった。では、日本語を獲得する過程にある子どもは、どのように授受表現を使用し、また、その使用を通してどのように日本社会の規範・文化的価値観を理解・再生産していくのだろうか。近年、「てあげる」について、親子の発話に着目した研究が見られ、養育者の発話では、聞き手（兄/姉）に何らかの行為をするよう指示をする「行為指示」³が多いこと、言語社会化と関わりのあることが指摘されている⁴。「てあげる」・「てもらう」は恩恵の意を含む点で共通するが、異なる方向を示すことができる。本発表は、家庭内の「てもらう」使用について、主に間接的行為指示（命令形などを使用せず、間接的に指示する）としての実践を示し、日本語を獲得する過程にある子どもの言語社会化の観点から、年長者は年少者を支援するものであるという人間関係における規範が伝えられていることを明らかにする。

1. 調査方法

関西在住の 4 組の養育者と子ども（3 歳~6 歳の兄/姉、弟/妹）を対象とし、2020 年 8 月~2021 年 3 月に、各家庭で月に 1 回約 1 時間のビデオ撮影を 6 回行い（計 24 時間）、家庭内の「てあげる」「てもらう」「てくれる」使用に着目した。本発表では、主語が行為の受け手となる「てもらう」に焦点を当てることで、間接的行為指示の実践を明らかにする。

2. 分析方法

本発表では、会話分析の手法を用いて言語行動及び非言語行動（視線や身体の向きな

¹ 庵功雄（2001）『新しい日本語学入門ことばのしくみを考える』東京:スリーエーネットワーク

² Ochs, E. & Schieffelin, B. B. (1984). Language acquisition and socialization: Three developmental stories and their implications *Culture theory: essays on mind, self, and emotion*. Cambridge: Cambridge University Press. pp.277-320.

³ 熊取谷哲夫（1995）「発話行為から見た依頼表現-発話行為から談話活動へ-」『日本語学』14-11, pp.12-21, 明治書院

⁴ 遠藤智子（2015）「構文の使用と社会的規範-家庭内相互行為における『てあげる』構文を例に-」『日本認知言語学会論文集』15: 171-182

ど)について詳細に分析する。会話分析は、録音・録画をデータとし、その書き起こしを用いて分析を進めるものであり、文脈の中で発話を捉える研究手法である。まず、事例の詳細な分析を行い、次に、その分析を通して日本の文化・社会の観点から考察を行う。

3. 養育者の発話

以下の事例では、養育者が妹に対して「てもらう」を使用した発話をすることで、間接的に兄に行為指示（会話の参与者になんらかの行為をさせるための発話）を行っている。

事例1（2020年9月18日）母、兄まさとし（6;1）、妹かんな（4;2）（すべて仮名）

抜粋の前、兄妹はカメラに物を近づけ、その色が画面に映る様子を「～色の世界」と名付け遊んでいた。事例の初め、妹がスカートを持ち、カメラに映す材料として提示する。

01	妹：	じゃ（0.7） じゃこの（0.2） ピンクの(.)ピンクのさ世界《ピンクのスカートを手に取る》
02		（0.7）
03	母：	ピンクの世界？
04	妹：	うん。
		（05-09 行目中略）
10	母：→	かんながや（1.1） やりながらだと見れないからまさとしにやってもらって、ピンクの世界見たら？《指でつまんで持ち上げるような動作をする》
11		（1.9）《兄妹ともに母を見る》
12	妹：	誰かやるの？最初から。
13	兄：	まさとしが＝《かんなが持っているスカートを取ろうとする》
14	母：	＝まさとしが <u>が</u> 持つて：ピンクの世界やるから：かんなが画面見たら。いいんじゃない？
15		（1.0）
16	兄：	[まさとしも
17	妹：	[いいよ。まさとしこれ持つて。《兄にスカートを渡す》

母は、妹に対して「やりながらだと見れないから」と理由を説明した後、「まさとしにやってもらって、ピンクの世界見たら？」と提案し、段取りを説明する（10行目）。これにより、兄がスカートを持ち、妹がカメラの画面を見るという役割が付与される。妹に対して「まさとしにやってもらって」と発話することで、間接的に兄に指示を出していると言える。そして、兄と妹が協力して一つの遊びを行うよう活動への参与も変化している。しかし、妹は誰がスカートを持つ/見るかが理解できず、12行目で「誰かやるの？」と修復⁵を開始している。一方で、兄は「まさとしが」と自身を主語とする発話を開始する（13行目）。その続きは発話されないが、発話と同時に妹の持つスカートを取ろうとすることから、母の発話意図を理解し、自身の役割（スカートを持つこと）を認識していることは

⁵ Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). Preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53, 361-382.

明らかである。また、兄の発話に途切れなく続く形で母がそれぞれの取るべき行動を説明している（14行目）。その後1秒の間が生じ兄妹共に返答をしていないが、その後兄と妹の発話が重なり、兄は「まさとしも」と発話することで自身も画面を見たいということを示し、妹は「いいよ。」と母の提案を受諾し、兄に「持って」と指示すると同時にスカートを手渡している（16-17行目）。

この事例においては、母から妹に対する「てもらって」を使用した発話が間接的に兄に対する行為指示となり、兄が妹の利益となる行為を行うこととなる。それにより、兄妹による協働での活動が可能となっている。

4. 子どもの発話

以下の事例では、子どもが養育者に対して「てもらう」を使用した発話をするることにより、間接的に行為指示を行っている。

事例2（2021年2月12日）母、兄はやと（6;8）、弟きよと（4;7）（すべて仮名）

兄弟がそれぞれ学習ドリルをしており、母がそばでその様子を見ている。

01	母：	オッケ:じゃあは《ドリルに丸を付ける》
02	弟：	できた。
03	母：	シール
04		(1.3)
05	兄：→	貼ってもらってだって。
06		(2.1) 《母がページをめくる音》
		(07-14 行目中略 母がシールを探している)
15	母：	はい。《シールを取って兄に手渡す》
16		(0.7)
17	兄：→	あ、じ-貼ってもらうんだよ。《母にシールを返す》
18		(0.6)
19	母：	hhh いいの？お母さん貼って=貼りたいのかなと思って。《ドリルにシールを貼る》
20		(0.6)
21	兄：	ありがとう……。

兄弟それぞれの監督をしている母が「オッケ」と兄の課題が終わったことを認めてドリルに丸を付け（01行目）、ご褒美のシールに言及する（03行目）。その続きを補うように兄が「貼ってもらってだって。」と発話し、協働で発話を完了させている（05行目）。兄は「てもらう」を使用した発話により、自身が行為の受け手であること、貼るという行為を行うのは自分ではない他者であるということを示す。しかし、母はそれには応答せずシールを探しており、シールを見つけると「はい。」と兄に手渡す（15行目）。この行為は、兄にシールを貼るよう指示するものである。それに対して兄は再度「てもらう」を使用し、「貼ってもらうんだよ。」と発話することで、あくまでも自身は行為の受け手であると

主張する（17行目）。そして、兄はこの発話と同時に手渡されたシールを母に返しており、母が行為を行うということを示している。シールを返された母は笑いを交えて「いいの？お母さん貼って」と確認をしながらシールを貼る（19行目）。その行為に対して兄は「ありがとう」と発話し、他者からある行為をし「てもらった」ことに感謝を示す。

この事例において、兄は「てもらう」を使用して自身が受け手であることを主張し、また、シールを返すという非言語行動により、その与え手が母であるということを示す（05, 17行目）。そして母がそれを受諾し（19行目）、兄はその行為に対して感謝を表明する（21行目）。

5. 言語を通して伝えられる人間関係における規範

養育者は、弟/妹を聞き手としながらも間接的に兄/姉に行為指示を行うために「てもらう」を使用している。兄/姉は、養育者の弟/妹に対する発話を聞き、弟/妹に対して行為の与え手となろうとするのである。養育者が「てもらう」の使用により間接的に行為指示を行うというのは、先行研究には見られなかった新たな知見である。養育者による直接的な行為指示は明瞭であるというメリットがあると同時に兄/姉からの反発を招くという可能性もある。一方、間接的な行為指示は兄/姉に選択の余地があり、反抗を抑止する効果があると考えられる。そして、養育者からの弟/妹に対する発話を聞いた兄/姉は、弟/妹に対して行為の与え手となるために行動する。その結果、兄/姉と弟/妹が協働で活動を行うようになる、あるいは、2人以上でなければできない作業が可能になるのである。

養育者は、年長者は年少者をサポート・手助けする存在であるという人間関係における規範を示すことで、兄/姉の弟/妹に対する思いやりの心を育み、兄/姉という立場を自覚させようとしている。また、子どもは、幼児期より間接的な行為指示を理解し、年長者が行為の与え手となり、年少者が行為の受け手であるということ学んでいくと考えられる。

子どもの発話では、兄/姉が、養育者に対して「てもらう」を使用することによって、自身が行為の受け手であるということを示し、間接的に養育者に指示を出す事例が見られた。また、弟/妹による使用は見られず、母が妹に対して「てもらう」を使用する事例において、母の発話を理解していない場面が見られ、「てもらう」を習得する過程にあることを示唆するものであると考える。

トランスクリプトに使用した記号

記号	意味	:	音の伸ばし(一つで0.1秒を示す)
(数字)	0.2秒以上の間(数字は秒数)	[]	発話が重なる部分
(.)	0.1秒以下の間	<u>下線</u>	強調されている部分
?	上昇イントネーション	=	間がなく繋がっている発話
° °	音が小さい部分	h	笑い
-	発話が途切れている部分	(())	注釈